Manapio 放送大学機関リポジトリ The Open University of Japan Repository

闇齋版神代紀の訓読上の特色について

著者	杉浦 克己
雑誌名	放送大学研究年報
巻	10
ページ	172(23)-155(40)
発行年	1993-03-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1146/00007318/

闇齋版神代紀の訓読上の特色について

杉浦克己[*1]

はじめに

ここに言う『闇齋版神代紀』とは、山崎闇齋及びその門人の手によって上梓されたとされている、日本書紀神代上下二巻の訓点付きの諸版本の総称である。これに該当するものとして、黒板（大正十二年）及び丸山（昭和三十年）には、『延享二年闇齋版』『梨木祐之改正版』『下御霊社版』の三種の名が見える。本稿ではこれらの三本を一括して『闇齋版神代紀』（以下「闇齋版」と略記することがある。）として扱うこととする。

山崎闇齋には『神代巻風葉集』や『神代巻講義』（佐伯有義『神道分類総目録』の「垂加神道」の項には『神代講義』とあるが、同一の書を指すとみなせる。）があり、特に晩年は書紀研究に精力を傾けていたことはよく知られている。一般に、闇齋版神代紀諸本は、このような闇齋の書紀研究をふまえて成ったものと考えられてきた。しかし、闇齋版神代紀を詳細に検討してみると、『神代巻風葉集』などにみられる闇齋自身の書紀本文についての考え方や、いわゆる「嘉点」（闇齋点）として漢籍等にみられる闇齋の訓読法とは異なる性格を持つと考えざるを得ないような部分も多く存するのであって、単純にこれら闇齋版諸本を闇齋自身とと直接結び付けることは危険だと言い得ることがわかる。主に訓読の観点からこのことを実証し、闇齋版の性格を明らかにすると共に、その成立の背景を考察しようとすることが本稿のねらいである。

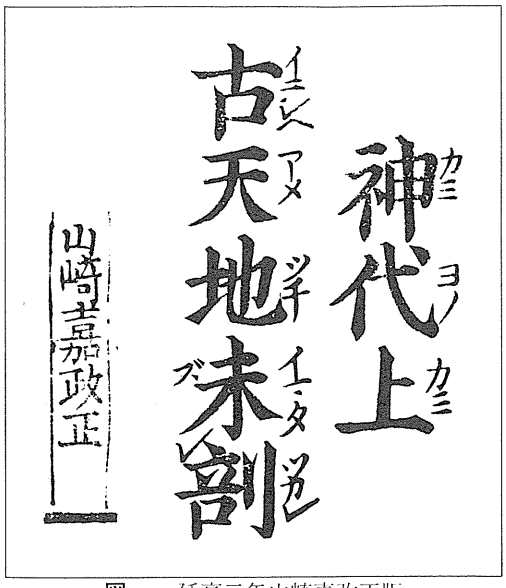
なお、考察の基礎とした闇齋版の上記三本はいずれも架蔵のものを用いた。

*1 放送大学講師（人間の探究）

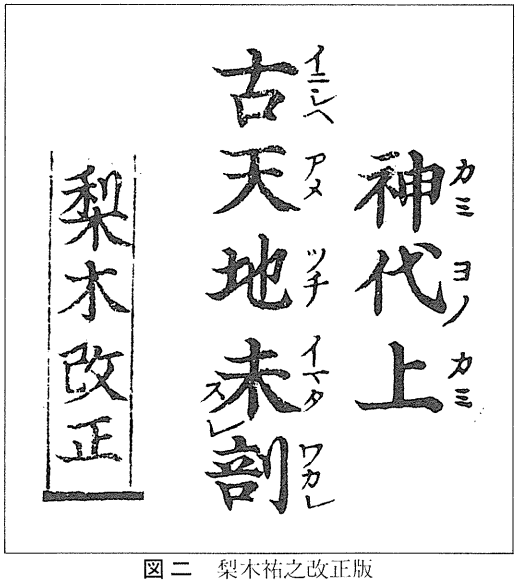
放送大学研究年報　第一〇号（一九九二）二十三-四十頁
Journal of the University of the Air, No. 10 (1992) pp. 23-40

書誌

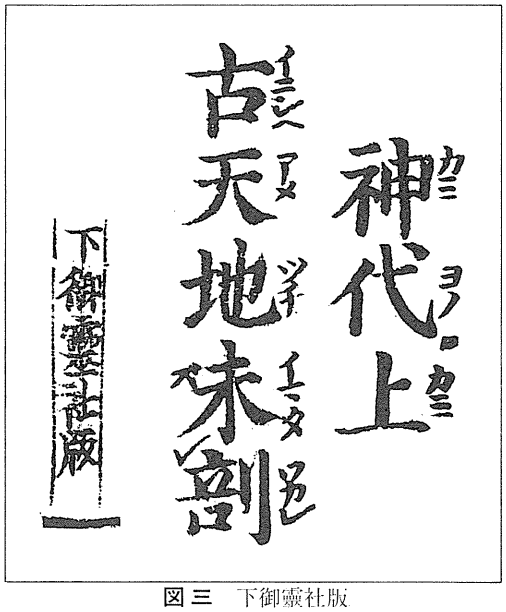
先ず、闇齋版三本についてその書誌の概略を示す。三本とも体裁は美濃版、上巻四十八丁、下巻四十四丁、一面八行、一行十六文字詰めで、紙型、版型、書体はともに相類似し、一見して互いに近しい関係にあることは明らかである。以下に各々の特色を列記すると共に、参考として各本の上巻冒頭部分と版心の下部を、図一～図三に掲げる。



図一　延享二年山崎嘉改正版



図二　梨木祐之改正版



図三　下御靈社版

『延享二年山崎嘉改正版』

紙型は一面縦二七八ミリメートル、横一九四ミリメートルで、三本の中で最も大きい。版型は天地の界線間が二〇七ミリメートル、版心中央から左右の界線までが一六三ミリメートルである。刊記は架蔵のものには見られないが、他所に蔵されている刊記のある伝本（神宮文庫蔵本及び鹿島神宮宝物館蔵本による）に照らして、同一の版、同一の刷とみなし得る。表紙は架蔵のものは、朽ち葉色の薄葉を貼ったものである。表紙左上部に題箋の跡がみられるが、題箋自体は欠落している。先に挙げた有刊記の別伝本には、次に述べる二本と同様の「神代巻上（下）」の題箋が上下両冊にある。おそらく架蔵のものにも元々は同様の題箋があったものであろう。各丁の版心下部に「山崎嘉改正版」の文字がある。これについては「山崎嘉政正版」と見る向きもあるようだが、ここでは黒板（前掲）、丸山（前掲）に従って「山崎嘉改正版」としたい。なお以下本書を「延享二年版」と略記することがある。

『梨木祐之改正版』

紙型は一面縦二七六ミリメートル、横一八四ミリメートル、版型は天地の界線間が二〇五ミリメートル、版心中央から左右の界線までが一六二ミリメートルである。表紙は架蔵のものは藍色の薄葉を貼ったもので、上下各冊に縦一八二ミリメートル、横四一ミリメートルの子持ち界線入りの刷り題箋があって、「神代巻上（下）」と記す。刊行の年次を示す刊記はないが、下巻末尾に「石原蔵版」の文字があり、いわゆる石原版の一つであることがわかる。本書は丁の上欄外に「貴一作尊」のように校合の跡を示しており、これは上巻に六箇所、下巻に十箇所見られる。このような校注は他の二本にはみられない。ここにいう「一本」に相当する本は、管見の限りでは完全に一致するものはみいだし得ていない。おそらく複数の本によっているものと思われる。また、各丁の版心下部に「梨木改正」の文字があり、闇齋の門人である梨木祐之の手になるものであることを示している。梨木祐之は元々賀茂社の出で、闇齋の下で垂加神道を修め、後に下賀茂社祠官となって葵祭の復活に尽力するなど、同社の再興に活躍した人物として知られている。日本書紀についても『神代和解』『神武講義』等の述作がある。なお以下本書を「梨木版」と略記することがある。

『下御霊社版』

紙型は、縦二四七ミリメートル、横一七九ミリメートルで三

本の中で最も小さいが、版型は天地の界線間が二一四ミリメートル、版心から左右の界線までが一六八ミリメートルで、逆に三本の中で最も大きい。表紙は藍色のしぼ入り紙で、上下各冊の左上部に、縦一七四ミリメートル、横四一ミリメートルの子持ち界線入りの刷り題簽があって、「神代巻上（下）」と記す。題簽の書体は「梨木改正版」とは異なっている。各丁の版心下部に「下御靈社版」の文字があって、京都下御靈神社による刊行であることがわかる。刊行の年次を示す刊記はないが、表紙や本文の紙質、刷りの具合いなどから推して、三本の中でこの下御靈社版が最も新しく、江戸時代末あるいは明治に入ってからのものと思われる。また、下巻裏見返しに「西京書肆丁字屋栄助」の文字がある。これは寛永頃以降から門徒系の仏書の出版元として知られていた京都の書肆丁字屋（西村九郎衛門）のことと思われる。丁字屋は仏書以外の出版は余り多くないようで、特に明治以降は「仏書屋護法館」の商号を用いるようになっているが、そのような中で本書が刊行された事情は不明である。

闇齋版三種間の本文及び訓読の異同

ここに取り上げた闇齋版三種間の本文の異同としては、

（一）　四神出生章一書第六で、延享二年版・下御靈社版にある「一云泉津日狭女」の六文字の割り注部分を梨木版では欠いている。

（二）　寶鏡開始章一書第一で、延享二年版・下御靈社版では「思兼神云者」とする部分の「云」字を梨木版では欠く。ただしこの部分の訓読で、梨木版は「ト云フ」と訓み方を振っており、この訓にみられる「云」字と本文が何らかの形で紛れた可能性はある。本文の「云」字は乾元本、寛文版本などには見えるが、弘安本以下の多くの古写本や版本には欠くものが多い。（乾元本では傍注で「云」字を存疑としている。）

の点を挙げることができる。さらに文字自体には異同はないが、

（三）　四神出生章一書第八末尾の訓注部分で、延享二年版・下御靈社版は、一行十五文字であるべき（一行十六文字詰めで、一書部分は行頭を一文字文下げるため十五文字詰めとなる。）所をここに限って十四文字詰めとしている（上巻十九丁裏一行目）が、梨木版は十五文字詰めである。このため以下の丁で一行づつの行詰めのずれが生じている。

（四）　各章の一書部分の中で「一云…」として続く箇所を、梨木版では行替えせずに続けて記すが、延享二年版・下御靈社版では行替えをする。このため特に下巻では、末尾までに四行分の行詰めのずれが生じている。

の点がある。

これら以外には軽微な字形の差異を除いて本文漢字の異同は皆無である。また一及び四の点については寛文版本をはじめ多くの他本が延享二年版・下御靈社版と同様である。

一方訓読の面でも、僅かではあるが相互に差異が認められる。省略表記や濁点の有無などを除いて、積極的に訓読上の差異と認められる部分を次の表一に示す。

これらの内二～五は一連の箇所についての異同であり、これについては後の『神代巻講義』との関係の項で詳述する。六・七については何とも言い難いが、寛文版本の訓は両箇所とも延享二年版・下御靈社版に一致する。一の部分では「其」字を「ソノ」と訓むものは、古写本の中では『為縄本』のみであり、

〈表一〉

	本文	延享二年版	梨木版	下御靈社版	位置
一	其	ソノ	ソノ	ソノ	天地開闢章本伝
二	立花	タチナカラ右 タチトコロニ左	タチナカラ	タチトコロニ	寶劍出現章本伝
三	姫	・・ヲ	・・ニ	・・ヲ	同右
四	為	トリナシテ（右） ツクリテ（左）	ツクリテ	トリナシテ	同右
五	櫛	・・ニ（右） ・・ヲ（左）	・・ヲ	・・ニ	同右
六	聞	・・テ	ウケタマハリ	・・テ	海宮遊行章本伝
七	聽	キコシメサ	キキ玉ハ	キコシメサ	海宮遊行章一書第一

吉田本系の訓み方ではないのではないか、という予想を立てることはできるが、他に類例がないため、あくまで推測の域を出ない。これら以外には訓読の面でも、三本の間の大きな差異を見いだすことはできない。

図一～図三に示したように版下の書体は互いに極めて類似するものの、完全に同一とはみなし得ないこと、また前項に示した如く版型にもごく僅かではあるが相互に差異が認められること、本文や訓読にも若干の異同があることなどから推して、三本は互いに極めて近しい関係にはあるが、全く同一、或いは同一版からの覆刻とはみなし得ない。また先後関係も必ずしも明確ではない。架蔵の三本でみる限り下御靈社版が最も新しいことは動かし難いが、残る二本の先後関係、及び下御靈社版との関係は、明確には決め難い。本文の版下の書体や本文・訓読の異同をみる限り下御靈社版は延享二年版により近いとも言えるが、完全に一致するわけではない。またどちらかがどちらかを受けて訂正加筆して整備した、ということも一概には決め難い。敢えて憶測すれば、梨木版が他の二本に先行して先ず作られ、それを訂正する形で延享二年版が成り、さらにこれを再版修正したものが下御靈社版である、と見るのが最も穏当であろうか。

闇齋版と寛文九年版本の本文の異同

闇齋版と寛文九年版本（以下「寛文版本」と略記することがある）の本文の異同箇所は、異なり文字数で僅かに二七箇所であって、例えば、黒羽版が神代上下巻のみでも実に二百箇所近くもの異同を持つことから比較しても、ごく僅かであると言い得る。特に黒羽版では数文字からある場合には数行にもわたって大きく本文を改編して、編者自らの解釈を積極的に本文校訂の上にも反映させているが、闇齋版にはそのような箇所はなく、本文の異同も全て文字単位のことがらとみることができる。異同の典型を下御靈社版と寛文版本の対比でみたものを次の表二に掲げる。（なお、掲出位置の後に「他」を記したものは、掲げた以外の箇所にも同様の差異が認められるものである。）

これをみても明らかなように、本文の異同といっても、七や十三の例などを除いて、そのほとんどがいわゆる異体字の範囲に納まることがらなのであって、意味内容にまで関わるような文字の差異は皆無である。

また、いわゆる吉田本系の諸写本や寛文版本の神代七代章一書第二末尾の訓注「葉…爾」の九字、および四神出生章一書第七の訓注「倉…岐」の一六三字は、その内容からして、前者は

〈表二〉

	闇齋版	寛文版本	位置
一	妙	妙	天地開闢章本伝
二	竝	並	同右他
三	卽	即	大八洲生成章一書第一
四	空	宜	同右他
五	迺	廼	四神出生章本伝他
六	青	青	同右他
七	磐	磐石	同右
八	畝	畝	四神出生章一書第六他
九	情	情	同右他
一〇	堅	堅	瑞珠盟約章本伝他
一一	黑	黒	同右他
一二	妒	妬	瑞珠盟約章一書第三
一三	太諄	大諄	同右
一四	備	備	同右
一五	腳	脚	寶劍出現章本伝他
一六	座	座	寶劍出現章一書第三他
一七	曽	曾	同右他
一八	鄕	郷	寶劍出現章一書第四他
一九	養	羕	天孫降臨章本伝他
二〇	宜	宜	同右他
二一	奇	奇	同右他
二二	悪	喪	同右他
二三	崎	碕	天孫降臨章一書第一他
二四	敕	勅	海宮遊行章一書第一他
二五	畱	留	海宮遊行章一書第二他
二六	緜	綿	同右他
二七	進	進	同右他

同章一書第一、後者は同章一書第六の末尾に、本来各々あるべきものと考えられる箇所である。このことは吉田本系の諸本でも、『水戸本』の同所への傍注や『釈日本紀』の「乱脱」の項でも指摘されている。また江戸時代の版本でも黒羽版はじめいくつかのものは、本来の位置と考えられる所へ動かしているが、闇齋版では寛文版本のそれに従ったままとなっている。

闇齋版と寛文版本の訓読の異同

訓読の面からみても、闇齋版と寛文版本の差異はごく僅かである。仮名表記の省略の仕方の違いなどによる異同を除いて、明らかに異なる訓み方と思われる例は、延べ二百八十箇所程度に過ぎない。江戸末から明治初にかけての他の諸版本（黒羽版や田中頼庸校訂日本紀など）が、寛文版本とは大きく異なる訓み方をしていて、異同箇所を計数することそれ自体が不可能と思われることと比べると、本書がいかに寛文版本に近いかがよくわかる。

訓読の異同箇所として挙げ得るものは、おおよそ以下のような典型にまとめることができる。下御靈社版と寛文版本の比較の形で、出現順にその大略を次の表三に示す。これらのうち、四、四九、五一などの例は、寛文版本の省略表記型を補って示したものと考えられる。また、六、九、一五、二一、二三、三

〈表三〉

	本文	闇齋版	寛文版本	位置
一	猶	・ヲ（右） ・・シ	・ヲ	天地開闢章一書第四他
二	喜	アナウレシ	アラウレシ（右） アナ（左）	神世七代章本伝
三	反	カヘリテ	カヘツテ	同右
四	以	モテ	・テ	同右
五	遘合	ミトノマクバイ	ミトノマクハイ	同右他
六	往	ユイテ	ユヒテ	同右他
七	画滄海	アヲウナハラヲ カキナシテ	シホコヲロコヲロ カキナシテ（右） カキナシアヲ ウナハラヲ（左）	神世七代章一書第一
八	降居	アマクタリマシ	アマクタリマス	同右
九	八尋	ヤヒロ	ヤイロ	同右
一〇	將	マサ・（右） シテ（左）	・・ニ（右） シテ（左）	同右
一一	少男	ヲトコ	ヲトコヲ	同右他
一二	少女	ヲトメ	ヲトメヲ	同右他
一三	奏	マウシ玉フ	申シ玉フ	同右
一四	卜合	ウラアフ	ウラフ	同右
一五	教	アヂハヒ	・・ハイ	同右
一六	欲	オモフトノ玉ヒテ	ノ玉ヒテ	神世七代章一書第二
一七	握	トリテ	トツテ	神世七代章一書第十
一八	句句廼馳	ククノチ	クグノチ	四神出生章本伝
一九	天照大神	アマテラス ヲホカミ	アマテラス ヲホカミ	同右割注
二〇	宜	・・シク（右） ヘカラ（左）	ムヘ（右） ヘカラ（左）	同右

二一	勇悍	イサミタケフシテ	イサミタキウシテ	同右
二二	勅	ミコトノリ シ玉ハク	コトヨサシ（右） 玉ハク ミコトノリシテ（左）	同右
二三	遂遂	ヤラヒキ	ヤライキ	同右
二四	顧眄之間	ミルマサガリ	ミルマサカリ	四神出生章一書第一
二五	死	コトナリ（右） コトアリ（左）	コトナリ	四神出生章一書第二
二六	順	マニ〳〵	・・・・テ（右） マニ〳〵（左）	同右
二七	小便	ユハリ	ユバリ	四神出生章一書第四
二八	乃	ス・・・	・・・チ	四神出生章一書第六他
二九	・命	・ト	トゝ	四神出生章一書第六他
三〇	飡泉之竈	ヨモツヒクヒ	ヨモツヒクイ	四神出生章一書第六
三一	驚	ヲトロキ玉ヒテ	玉ヒテ	四神出生章一書第六
三二	到	・トノ玉ヒテ	・トノ玉イ	同右
三三	千五百	イヲ	イホ	同右
三四	際	アイタ	アヒタ	同右
三五	太弱	・ノ玉ヒテ	ノ玉テ	同右他
三六	潛濯	カヅキスゝク	シツミスゝク（右） カキツ（左）	同右
三七	勅任	コトヨサシテ	コトヨザシテ	同右
三八	恚恨	フヅクム	フヅク	同右
三九	泣耳	・ト申玉フ	マウジ玉フ	同右
四〇	斬	キリテ	キツテ	四神出生章一書第七
四一	足	アシ	フモト	同右
四二	故	・レ	ユヘニ	四神出生章一書第九
四三	白事	マフスコト（右） シルキコト（左）	マフスコト	同右

四四	靈運當遷	アツシレ	アツシレ（右） カミアカリ マシナント（左） ミイノチ カミアカリ（左）	瑞珠盟約章本伝
四五	髻鬘	ミイナタキ	ミナタキ（右） ミツラ（左）	同右
四六	姉	アネノミコト	ナネノミコト	同右他
四七	天忍骨尊	アマノヲシホネノ・・ト	アマノヲシヲネノ・・ト	瑞珠盟約章一書第一
四八	逐降	カンヤラヒニ ヤラヒキ	カンヤライニ ヤラヒキ	寶鏡開始章本伝
四九	立	タテテ	・テゝ	天孫降臨章本伝
五〇	然	シカレトモ	シカモ	同右他
五一	神	カミ	・ミ	同右他
五二	咸	コト〳〵ク	コト〳〵クニ	同右
五三	可	ヘケン	・ケン	同右他
五四	高皇産靈	タカミムスヒ ノミコト	タカンミムスヒ ノミコト	同右
五五	不復命	申サ	申	同右
五六	不來報	カヘリコト申シニ	カヘリコト申スニ	同右
五七	洞達	トヲリテ	トヲツテ	同右
五八	乃	ス・・	無訓	同右他
五九	大葉刈	オホハカリ	カリ（右） 二字ヨマス（左）	同右
六〇	當	・サニ（右） ・ヒ（左）	マサニ	天孫降臨章一書第二他
六一	殿	ミアラカ	ミアカ	同右
六二	手玉玲瓏	タタマ モ ユラニ	タタマ／モユラニ	天孫降臨章一書第三
五三	幸	サヂ	サチ	海宮遊行章本伝
六四	新	ニヰシキ	ニイシキ	同右

〇、三二、三三、三四、四七、四八、六四などは仮名遣いを改めたものであって、特に九の「八尋」ヤヒロ（闇）〉ヤイロ（寛）のように、寛文版本の仮名遣いでは本来の語義を誤って受け取られる恐れのあるような箇所に、訂正を加えている点などに注目される。さらに、三、一七、四〇、五七などは、寛文版本の音便形を、もとの形に直しているものであって、この逆は少い点も注意できる。二七、三七、六三などは濁点の有無に関する差異であるが、江戸時代の版本一般に、濁点の表示は必ずしも十全なものではなく、これらの点を両本間の積極的な差異とみなすことはできないと思われる。

これらに加えて、三六、四四などは寛文版本が二訓併記となっている（しかも三六については寛文版本の左訓「カキツ」は「カツキ」の誤りであろうと思われる。）を一訓に整理したもの。四二の「故」字の訓「ユヘニ」（寛）を「カレ」（闇）とするのは、神代上下巻を通じて、寛文版本でも「故」字はほとんど「カレ」と訓むなかで、この箇所だけについて前後の関係から「ユヘニ」としている点を、全編統一して「カレ」としたものと考えることができる。（同様の箇所がもう一箇所ある。闇齋版では「故」字は全て「カレ」としている。）

これらを除いた残りが、積極的に寛文版本とは異なる訓み方を採ったものということになるが、これはごく小数である。

内容をみてみると、四一の「足」字を「フモト」とせずに「アシ」とする点が、他の諸本にはみられないこと、五九の「大葉刈」を「寛文版本」始め吉田本系の諸本が皆「大葉」二字を「不讀」扱いとしているのに対して、闇齋版は「大葉」まで含めて訓んでいる点、一九の「アマテラスヲホンカミ」と五四の「タカミムスヒ」の例などが本書の特徴的な訓み方と言い得るが、これらをもって本書が積極的に独自の解釈に基づいた訓み方を示しているとすることはとてもできないと思われる。五四で寛文版本が「タカンミムスヒ」とするのは、他の吉田本系の諸本には見られないことで、むしろ寛文版本の特色である。また、寶劍出現章一書第六で「強暴」字を寛文版本では「アジカル」とするが、闇齋版でもこれはそのまま受け継がれているような例も多くみられるのである。

これらの点からみても、闇齋版は全面的に寛文版本の本文と訓読に依拠し、ほとんど全ての点でこれに従っているが、ごく一部には差異が認められること。しかしその差異は積極的に寛文版本の本文や訓み方に異を唱えようとするものではなく、むしろ、その誤りや不備を補おうとするものであると考えられること。などの点が明らかになった。

神代巻講義の記述と闇齋版の関係

先にも述べたように闇齋には独自の書紀研究書として『神代

巻講義』（以下「講義」と略記することがある。）『神代巻風葉集』（以下「風葉集」と略記することがある。）があることが知られている。これらの闇齋の書紀研究にみられる本文の解釈と、闇齋版の訓読との関係を次にみてみたい。なお以下の考察には、日本古典学會『山崎闇齋全集・巻四・巻五』（昭和一一年、昭和五三年ぺりかん社より復刊）を用いた。

『神代巻講義』の名を冠する伝本には現在四種が知られているが、その元となったのは、闇齋の講義を浅見絅齋が筆録した三巻本で、ここに言う『神代巻講義』も同書を指す。本文は、漢字片仮名混じりのいわゆる抄物体で記されている。先行の諸本や諸注釈書の説を引いて、闇齋自身の解釈を述べているが、特に忌部正通の『神代巻口訣』に多く依っているらしく、「三十二丁ノウラノ口訣」（二百七十頁三行目・以下『神代巻講義』の頁数は日本古典学会編『山崎闇齋全集・第四巻』ぺりかん社再刊版の頁数に依って示す。）のように詳細に『口訣』を引いている箇所もある。

自らの神道説に関わる解釈が主で、訓読についての直接的な記述は必ずしも多くない。それらの中には「臥（フシナガラ）」（二一二頁・四神出生章一書第二）や「疾風（ハヤチ）」（二六八頁・天孫降臨章本伝）のように闇齋版の訓み方に一致するものもあるが、これらは同時に寛文年版本のそれにも一致する。一方闇齋版に見える訓み方とは一致しない部分もいくつか見いだすことができる。その例を以下に示す。

「故（カルガユヘ）」（二一九頁四行目）四神出生章一書第六の「故」字の訓み方についての記述であるが、闇齋版のほうでは「カレ」と寛文版本と同様の訓になっている。

「所帯（ミハカセノ）十握劔」（二三四頁三行目）瑞珠盟約章一書第一の天照大神の劔にかかる「所帯」字について、寛文年版本では「ミハカセル」という訓み方をしており、他本も多くは同様で、希に「ハカセル」の訓がみられる箇所である。しかし「ミハカセル」という訓では、接頭辞「ミ」が動詞に付くことになり、日本書紀の訓読の中でも、また一般的な語法の上でも異例としなければならない。この点については、門前（昭和三一年）に『古事記』の同説話部分の「所御佩之」字についての詳細なご考察があって、「劔」を表す語として「ミハカシ」と名詞に読むべきであることがわかる。神代巻講義の「ミハカセノ」という訓み方も、この点を考慮した周到な訓と言い得るが、闇齋版では寛文版本と同様に「ミハカセル」となっている。

「立…髻」（二五二頁八行）寶劍出現本伝の「立…髻」の十六字について、神代巻講義では、書紀の原文をそのまま引いて、訓点を付けてその訓み方を次のように示している。

立化奇（タチナカラ）稲田姫為二（ヲツクリテ）湯津爪櫛一而（ニ）挿二（サシ玉フ）於御髻一（ミウラニ）

このように本文を引いた記述は神代巻講義の中ではここ一箇所のみに見えるものである。この部分について梨木本は神代巻講義と同様の訓み方であるが、延享二年版は

立化(タチナカラ)奇稲田姫(ヲ)為(トリナシ)二湯津爪櫛一(ニ)而挿(サシ玉フ)二於御髻(ミツラニ)一

と、左右に二訓を併記し、下御靈社版は

立化(タチナカラ)奇稲田姫(ヲ)為(トリナシテ)二湯津爪櫛一(ニ)而挿(サシ玉フ)二於御髻(ミツラニ)一

としており、これは寛文版本と全く同じである。闇齋の考えに従うなら、梨木版のように読むべきなのであろう。闇齋の訓み方が反映した跡とみなすこともできるが、闇齋版三本の間で扱いが異なっており、完全に神代巻講義に依っているとは言いきれない。

『神代巻風葉集』の記述と闇齋版の関係

『神代巻風葉集』は『中臣祓風水章』と共に垂加神道の双璧（日本古典学會『山崎闇齋全集・第五巻』序文）と称せられ、垂加神道の中心的な著作とみなされている。内容は、神代紀の各章を挙げ、これに対する先行の諸注釈の記述を逐一引用した上で、「翁曰…」（一部では「翁謂…」とする箇所もある）として闇齋自身の説を記す形で編集されている。引用された諸注釈は広範囲に及び、引用のされかたも精密である上、現在では逸書となっているものも引かれていて、垂加神道のみならず中世以降の書紀研究の足跡を考える上でも重要な資料となるものである。

但し、この「翁曰」の記述は、文字どおり闇齋の書紀解釈の「神髄」を伝えるものであって、全体でも三七箇所（他に冒頭の日本書紀の成立事情を述べる序文部分に八箇所）しかなく、その内容も書紀本文の一字一句について云々するのではなくて、章段単位での全体的な解釈を述べるものが多いため、訓読と直接に関わる記述は必ずしも多くない。このような中で、目についた箇所を以下に掲げる

「國稚地稚」（天地開闢章一書第二）この部分について風葉集は「國稚地稚とは國土のういくしき事をいへり」として、引用した『神代巻口訣』の「稚ハ宇伊志也、地ハ幼也」との記述をはじめ、他のいくつかの諸注釈のこれに類する記述を肯定している。この部分の「稚」字については、寛文年版本はじめ吉田本系の先行諸本はことごとく「イシ」の訓を付けており、これらとは若干性格が異なると目されている『為縄本』のみが左訓に「ワカク」を持っているのが唯一の異例である。「イシ」という形容詞自体は「美しい」の意では平安時代以降の仮名文に用例を多く見いだし得るが、「若々しい」等の意で用いられた例は神代紀のこの箇所への付訓以外には用例が少なく、疑問

を持たれている語である。風葉集の「翁日」では、直接訓読のことには触れてはいないが、これを積極的に「若ひし」と見るならば、当然「ウヒシ」或いは「ウイシ」という訓み方を採るべきであろうが、闇齋版では先行諸本の訓み方を踏襲している。

「奥津棄尸」（寶劍出現章一書第五）風葉集では、引用した先行諸注釈をふまえて「オクツキ」或いは「オキツキ」とう訓み方を提出している。特に、天智紀や『萬葉集』巻九の田邊福麿の歌に見える「奥城」の例を引くなど、積極的に寛文版本などの諸本にみられる「オキツスタヘ」（仮名遣いはオ＝ヲ、ヘ＝エ・ヱなどがある）の訓に異を唱え、詳しく語義を述べている。しかし闇齋版の該当部分への付訓は「オキツスタヘ」と、風葉集の説を反映していない。

その他の闇齋の書紀研究と闇齋版との関係

『垂加文集上之二』（『山崎闇齋全集・第二巻』による）に収められている「伊勢太神宮儀式序」に神代下巻天孫降臨章の一節を引いて、これを訓読した、次のような箇所がある。

視二此寶鏡一當レ猶レ視レ吾可二與同レ床共レ
殿以為齋鏡一

（『山崎闇齋全集』第二巻・二百六十九頁下）

この部分の闇齋版での訓点は、

視二此寶ノ鏡一當マサニ猶コトクスレ視ミルカレ吾レヲ可シ二與トモニ同ヲナシクシテレ床ユカヲ
共ヒトツニシテレ殿ミアラカヲ以テ為スイハヒノ齋鏡一ト

となっていて、「伊勢太神宮儀式序」のそれとは一致せず、寛文版本と同様の訓み方である。些細な相違ではあるが、伊勢の御神体である寶鏡の由来に関わる部分でもあり、目につく相違点である。

いわゆる「闇齋点」と闇齋版の訓読との関係

闇齋は、もともと医家の出であって、仏門に一旦入った後に朱子学に修めて広く漢籍を学び、更に神道諸派を修めて独自の宗教的な考え方を形成していった。その漢籍等についての研究も、旧説にとらわれるのではなく、広く新しい視野をもって精緻な研究を残しているが、訓読の面でも、中世までのいわゆる博士家流の訓み方ではなく、彼独自の合理性をもった新しい訓読を試みている。これは以後一般に「嘉点」（闇齋点）と呼ばれ、訓読史上の一時期を画するものであると同時に、現代まで連なる訓読の基礎となった「道春点」と並んで江戸時代を通じ

て広く受け入れられる所となった。

漢籍の訓読と日本書紀に於けるそれを同列に比較することはできないが、ここに取り上げた闇齋版の訓読も、闇齋の名を冠する以上は、何らかの形でこの嘉点と関係を有するものと予想できる。

ただ、江戸時代の漢文訓読一般については、その詳細な部分にまでわたって研究が成されているとは言い難い部分も多く残っており、また「嘉点」「道春点」などという場合も、単に訓読のことのみでなく、注釈や解釈まで含めて言われる場合が多く、今までの所むしろこちらの方に考察の中心があったため、体系的な訓読の比較は充分にはできないのが現状である。

いわゆる嘉点の漢籍及びその注釈書の類から、その訓読上の特色として共通する事項の内のいくつかを挙げてみると、

（イ）「スナハチ」と訓む接続語のうち、「即・則・便・輙」は「チ」のみを送るが、「乃」字には「ス」のみを右肩に振る。

（ロ）場所などを表す「於」字は、下接する語に「ニ」を読み添えた上で返読して「オイテ」（「テ」字のみを表記する）と実訓で訓む。

（ハ）「而」字は、助字として扱う場合には不読として、上接する語に「テ」を読み添える。実字として「シカウシテ・シカレドモ」などと実訓で訓む場合は「シテ・トモ」のみを送仮名として表記する。

（ニ）文末助字のうち「耶・乎・哉」は、不読や上接語への読み添えとせず、実訓で「ヤ・カ」と訓む。

（ホ）「不」字を打消しの助動詞「ズ」に訓む場合、「ズ」と訓むときは「不シテ・不ト」のように下接する語のみを送り、「ザレ・ザル」などと訓むときは「不レバ・不ルトキ」のように「レ・ル」から送る。「非」字や、「未」の再読の場合の左訓も同様に扱う。

（ヘ）「令・教・使」などの使役を表す字は再読とせず、

令二人作レ悪一（シム　ヲシテ　サ　シキコト）（『孟子要略』）

のように間接目的語に「ヲシテ」を読み添え、直接目的語から単純に返読して、該当字を「シム」と訓む。

（ト）読み添えに用いる推量の助動詞「ム」は「ン」で表記する。

（チ）「自」字を「オノヅカラ」と訓む場合「オ」のみを右肩に振る。

これら以外にも、接続辞の訓み方や再読字の扱いなど、嘉点の特徴とすべき点は多いが、闇齋版及び寛文年版本を始め他の日本書紀の諸本と比較する上で重要と思われる点のみを挙げた。

このうち（ロ・ニ）の点については、小林（昭和五十二年）も指摘しておられるように、嘉点に限らず、中世までの、語句

単位に、文意に沿って訓を付ける訓み方から、一字毎に固定的な訓が定着していく近世から近代の訓み方への変遷を反映していると思われる。また、(ハ)は、右のような変遷に関わらず、近現代の訓読に至るまで、共通して行われている読み方である。

(ヘ)の使役字については、杉浦(平成四年)で報告したように、近世の比較的早い時期のものにみられる再読から、近現代の単純な返読への変遷を反映したものであろう。

(イ・ホ・ト・チ)の点は、漢字の訓み方や意味・用法の解釈とは直接関わらない、仮名の振り方の問題であるが、近世の様々な訓読法を比較した場合、むしろこのような点に、それぞれの特色が現れ易いとも言える。

これらの点について闇齋版の訓読を以下に挙げてみた。

(イ)に関しては、

乃生(チナス)レ兒(ヲ)(瑞珠盟約章一書第一)

のように嘉点とは異なって「乃」字も「チ」のみを送っている。

(ホ)に関しては

火火出見尊(ト)不(スシテ)レ聽(海宮遊行章一書第一)

のように、「シテ」が続く場合でも「ス」から仮名を付けた例と、嘉点と同様に「シテ」のみを送る例がみられ、嘉点諸本のように統一されてはいない。

(ヘ)に関しては

使(シテ)レ雉(ヲ)往(ユイテ)候(ミセシム)(天孫降臨章一書第一)

としているが、この例のような訓み方は、近世にあっては寛文年版本のような比較的早い時期の訓読に多くみられるものであって、これ以降漸く、使役字を再読文字として扱って、

(a)使(ツカハシテ)二(シム)レ雉(ヲ)往(テ)候(セ)一(『黒羽版』同箇所)

のように訓むものと、

(b)使(シム)二雉(ヲシテ)往(テ)候(セ)一(岸本宗道『日本書紀』同箇所)

のように近現代の訓読のように読むものがあって、嘉点はbに該当し、闇齋版とは異なっている。管見の限りでは日本書紀の訓読で、bの訓み方を採るものは、明治に入ってからのものにしかみいだし得ない。

（ト）については、齋藤（平成三年）が近世の漢文訓読における「ン」の用いられ方について述べておられるが、「ン」が当時の漢文訓読の一般的な表記法であったようで、闇齋版も嘉点と同様である。これは寛文版本も同様であって、特に異とすることはできない。

（チ）については、「オノヅカラ」と訓む「自」字に「オ」（または「ヲ」）のみを振る例は、必ずしも当時の漢文訓読における一般的な表記とは言い得ないと思われるが、日本書紀の訓読では、闇齋版、寛文年版本共に嘉点と同様である。

また、闇齋版には

不レ得（アツケ）レ預（シ）二天孫ノ饌（タテマツリモノニ）一（海宮遊行章一書第二）

のように語句単位である程度固定した訓み方をそのまま継承したと思われる箇所があるが、これは一字毎に固定した訓み方を返読に添って積み重ねていく道春点や嘉点などの近世以降の訓み方とは異なり、中世までの日本書紀訓読の伝統を引くものである。

まとめ

以上に述べてきたように、ここにとりあげた闇齋版は、その本文・訓読共に寛文版本のそれに全面的に依拠して成ったものであって、積極的に吉田本系の諸本や寛文年版本とは異なる見解を示そうとしたものではないこと。またそれは闇齋自身の書紀研究に基づいた、あるいはそれを積極的に取り入れようとしたものとは言い難いこと。従って、闇齋やその関係者の名を冠して刊行されているものの、彼らが直接にこれら闇齋版の編集刊行に関わったとは考え難いこと。などが明らかになった。

つまり、闇齋版神代紀は垂加神道（特に御靈神道系である可能性が高い）関係の何者かによって刊行されたものであることは明かなものの、内容的には垂加神道あるいは御靈神道とは関係は薄いと考えられるのである。

従って闇齋版は、江戸時代に数多く刊行された日本書紀の諸版本の内、積極的に自らの解釈を打ち出した『黒羽版』や『田中頼庸校訂日本紀』などのような性格を持つものではなく、流布本である寛文年版本、あるいはそのもとになったと考えられる、いわゆる吉田本系の諸本の伝統の上に立った、というより、ほとんどそれを引き写したものともみなし得る『櫻園書院版』や『江戸須原屋版』などに近い性格を持つものと位置づけることができる。寛文年版本は慶長勅版の権威を背景として広く受け入れられる所となり、数次にわたって再刷・再刻が成されているが、江戸時代中期以降にはこれに極めて近い、改刻本とでも言うべき日本書紀の諸版本が多く刊行されている。本書

もおそらくその一つに数えられるべきなのであって、闇齋の名も、後人の手によって本人やその門人達とは無関係に加えられたと考えるべきなのではないか。

特に、延享二年山崎嘉改正版と山崎闇齋を直接に結び付けることは、かなり難しいと思われる。梨木祐之改正版については、祐之自身の編集にかかるものと考えても良いのかも知れないが、とすれば祐之が、寛文版本を主、闇齋の説を従として扱ったと考えざるを得ず、これもまた垂加神道の伝流や、その中での日本書紀の受容を考える上で問題を含むのである。

（なお、本稿を草するにあたり、京都下御霊神社、伊勢神宮文庫、鹿島神宮宝物館の皆様に、貴重な資料の閲覧に特段のご配慮を賜ると共に、多くのご教示をいただいた。ここに銘記して改めて深謝申し上げる。）

〈比較の対象とした諸本〉

（版本）

寛文九年版本（初刻本・寛文九年版）架蔵
寛文九年版本（再刻本・安政三年版）架蔵
黒羽版日本書紀（天保十四年版）架蔵
田中頼庸校訂日本紀（明治十三年版）架蔵
岸本宗道『日本書紀』（明治二十五年版）架蔵
釈日本紀（無刊記本）架蔵

（古写本）

水戸本日本書紀（昭和十九年・日本文献学会叢刊一）
為縄本日本書紀（昭和五十七年・神宮古典籍印影叢刊・八木書店）

（闇齋著作）

神代巻講義（日本古典学会『山崎闇齋全集』第四巻・昭和十二年日本古典学会・昭和五十三年ぺりかん社再刊）
神代巻風葉集（同前第五巻）
文會筆録（同前第一巻）
垂加文集（同前第二巻）
孝經外傳（同前第三巻）
孟子要略（同前第三巻）

参考文献

黒板勝美『撰進千二百年記念日本書紀古本輯影』大正十二年・撰進千二百年記念会
佐伯有義『神道分類総目録』昭和十二年・春陽堂
丸山二郎『日本書紀の研究』昭和三十年・吉川弘文館
門前真一「古事記「所御佩之」の御について」昭和三十一年・『山辺道』第二号所収
小林芳規「漢文訓読体」昭和五十二年『岩波講座日本語一〇・文体』岩波書店所収
近藤啓吾『山崎闇齋の研究』昭和六十一年・神道史学会
近藤啓吾『続山崎闇齋の研究』平成三年・神道史学会
齋藤文俊「近世文語における助動詞「ン」—漢文訓読文中の用法の変遷—」平成三年・『國語と國文學』第六十八巻第二号・東京大学国語国文学会所収

杉浦克己「黒羽版日本書紀の訓読上に特色について」平成四年・『放送大学研究年報』第九号所収
高島元洋『山崎闇齋＊日本朱子学と垂加神道』平成四年・ぺりかん社

（平成四年十一月十四日受理）

A Study of the *Kundoku* in the *Ansaiban-Jindaiki*

Katsumi SUGIURA

ABSTRACT

Ansai Yamazaki and his apprentices did some research in the *Nihonshoki*. Since the end of the 17th century, some of the printed texts of the first two books of the *Nihonshoki* have been thought to have been edited by them, based on the results of their research. In general, these texts have been called the *Ansaiban-Jindaiki*.

However, these texts contain a lot of points which are different from the results of their research, and further, the texts are in fact similar to those of the *Kanbunhanpon*, the general text of the *Nihonshoki* since the end of the 17th century. The *Kanbunhanpon* was edited by members of a religious sect which *Ansai Yamazaki* opposed.

On the basis of these facts, it is concluded that the *Ansaiban-Jindaiki* was not edited by *Ansai Yamazaki* and his apprentices.